和陶止酒

陶の酒を止むに和す　紹聖四年六十二歳（一〇九七）雷州にての作。

丁丑歳，予謫海南，子由亦貶雷州。五月十一日，相遇于藤，同行至雷。六月十一日，相別，渡海。余時病痔呻吟，子由亦終夕不寐。因誦淵明詩，勸余止酒。乃和原韻，因以贈別，庶幾眞止矣。

丁丑の歳　予　海南に謫せられ　子由　亦た雷州に貶せらる　五月十一日　藤に相遇ひ　同行して雷に至り　六月十一日，相別れて　海を渡る　余　時に痔を病んで　呻吟し　子由　亦た終夕寐ねず　因って淵明の詩を誦し　余に勸めて酒を止めしむ　乃ち原韻に和し　因って以て別れに贈る　真に止むるに庶幾からん

丁丑の歳、わたくしは海南島に貶謫され、子由も雷州に貶謫された。五月十一日、藤州で出会い、一緒に旅行して雷州まで来た。六月十一日、子由に別れて海を渡った。私はそのとき痔を病んで痛みにうめていた。すると子由も一晩中、寝ないでいて、陶淵明の詩を誦して、私に酒をやめるように勧めた。そこで淵明の原韻に和して、別れのしるしとしたが、これで恐らく〝真に止める〟こととなろう。

1 時來與物逝
時来って物と逝く

2 路窮非我止
路窮まって我が止まるに非ず

3 與子各意行
子と各々意のままに行き

4 同落百蠻裏
同じく落つ百蛮の裏

5 蕭然兩別駕
蕭然たり両りの別駕

6 各攜一穉子
各々一穉子を携ふ

7 子室有孟光
子の室に孟光有り

8 我室惟法喜
我が室は惟だ法喜のみ

9 相逢山谷間
山谷の間に相逢ふて

10 一月同臥起
一月臥起を同にせり

11 茫茫海南北
茫々たり海の南と北と

12 粗亦足生理
粗亦た生理に足らん

13 勸我師淵明
我に勸む淵明を師とせよ

14 力薄且爲己
力薄きも且く己が為めにせよ

15 微痾坐杯酌
微痾杯酌に坐す

16 止酒則瘳矣
酒を止むれば則ち瘳えむと

17 望道雖未濟
道を望んで未だ済らずと雖も

18 隱約見津涘
隱約津涘を見る

19 從今東坡室
今従り東坡の室

20 不立杜康祀
杜康の祀を立てじ

【語訳】

●予…すぐあとにみえる余とともに一人称の代名詞。●呻吟…呻も吟。とくに、痛みがあって声を出すのにいう。●庶幾…恐らく…だろう。●子…あなた。弟の轍（字は子由）に向かっていう。●真止矣…陶淵の止酒の詩にみえることば。●意行…意に任かせ行く。●百蛮…福建・広東・広西地方の小数民族。●別駕…州の刺史の補佐官。東坡は瓊州別駕、子由は化州別駕。しかしその土地に行かないで別に安置（高官のものが貶謫されること）される場所が示される。●穉子…年若い子。東坡の伴う三男の過はこの年二十六歳。●孟光…梁鴻の妻。●法喜…仏家で、仏法を聞いて歓喜の心を生じることをいう。●一月…この詩の序にいう五月十一日から六月十一日まで。●海南北…広東省の雷州と海南島の儋との関係位置をいう。●生理…生活。●且…まあいまのところは。●為己…論語に「古の学者は己の為にす」。●微疴…疴は病い。●瘳…病気がなおること。●隠約…はっきりとはしないさま。●津涘…津は渡場。涘は水辺の地。●杜康…酒造りの名人。博物志にみえる。

【解釈】

時間の流れは、流れ来たってあらゆるものを伴って、流れ去って行く。その流れの中に立ち止まっているわたくしは、わたくしの意志で立ち止まっているのではなくて路がゆきづまりになったからである。君とそれぞれ思い思いの路を歩んでいたのが、いまこうして同じように百蛮の地におちこんだ。

ここに二人の別駕がまったくわびしい姿で、おのおの一人ずつ年端もゆかぬ子をつれている。君の室内には孟光のような妻がおいでだが、わたくしの室内にはただ位牌があるばかりだ。

山谷の中の街、藤州で出逢ってから、ひと月、起臥をともにして来たが、これからはひろいひろい海原を南と北に距てても、おたがいなんとか生きてゆくことだけはできよう。

君はわたしに、酒を止めた陶淵明をみならいなさいと勧める。「それはとてもとおっしゃるが、まあご自分の身のためを思ってがんばっていただくことです。痔のような、なんでもない病気はお酒のために起こるのです。酒をお止めになればきっとなおりますよ」。

彼岸を望みながらまだ渡らずにいたのが、どうやら渡し場だけは見つかったような気がする。これからわが東坡の室には酒の神、杜康を杞ることはすまい。

漢詩大系　蘇東坡　近藤光男より抄出